



タイトル GHQ 焚書図書開封 10
地球侵略の主役イギリス

著者 西尾幹二 (にしお かんじ)

出版社 徳間書店

発売日 2014年12月31日

ページ数 405 ページ

本書（本巻）は、イギリスがアジアにおいて、如何なる悪を働いたかに焦点を絞り込んでいる。すなわち、西欧の先端を走ったイギリスの閉ざされた闇を質しているわけである。

日本の過去の呼び戻しに対する強い熱意と期待が日増しに高まり、昭和 20 年以前の歴史を本格的に調べなければならない、との気運が歴史研究家の間でもこの数年少しづつ盛り上がりを見せている。一般の読書人にもそれはある。日本人はやっとそれに気が付いたようだ。

著者は、「西尾幹二の『ブログ論壇』」で次のように述べている。「歴史を学ぶのは、過去の事実を知ることだと考えている人がおそらく多いだろう。しかし、必ずしもそうではない。歴史を学ぶのは、過去の事実について、過去の人がどう考えていたかを学ぶことなのである」。

「昭和 20 年より前の日本人がどう考え、どう感じて日々を生きていたかの具体的な手触りを知りたい」という世間の人びとの不安な関心が近年グンと高まってきた。

今までだって戦前のことは概念として調べられ、知られているが、あの戦争を終わってから回顧風に綴られている文章はどうしても反省、失敗、批判の意識が言葉の端々に出てしまう。未来へ向けて運命を共に生きる感覚が当然ないのである。

昭和 20 年にパラダイムの転換があって意識の持ち方が変わった。日本語の扱いまで変わった。それ以前の世界にはもう戻れない。こんな近い過去なのに、戦前の文章は外国のように遠く、異質であった。その理由の半分は平和な繁栄が続いたからだが、もう半分は GHQ（アメリカ占領軍）によって日本人の生の体系が操作され、コードを嵌められてきたからである。

著者は、自身の「ブログ論壇」でも、以下のように語っている。すなわち、『欧米戦勝国は、「自由」とか、「正義」とか、「人道」とか、都合のよい言葉を、全部独り占めしてしま

った。さらに、自分たちは、あたかも「欺瞞」や、「残虐」や、「裏切り」とは関係がないという前提で、すべてを語るルールをさっさと敷いてしまった」。これらが如何に矛盾したものであったかは、第二次世界大戦後間もなく、アメリカも、イギリスも、フランスも、オランダも真っ先に植民地に戻ってきた。日本だけが一方的に侵略国家だったという欧米デモクラシーの正義の歴史観のウソに我々は後で気が付かされた。

国際情勢の変化で、日本国民は孤立感を深めた。世界のあらゆる国々と対等であって、米国ともかつて対等に渡り合っていた独立国としての昔の感触が蘇ってきた。

昭和前期の本の文体、価値観、人生観、世界観は今かえって非常に鮮明に感じられるだろうと著者はいう。

さっそく、目次をみてみよう。

- 第 1 章 明治以来の欧米観を考え直す
 - 第 2 章 イギリスのインド劫略の原点
 - 第 3 章 200 年に及ぶイギリスにシナ支配
 - 第 4 章 アヘン戦争の真相
 - 第 5 章 アヘン戦争の後始末にあえぐ無残な老廃国
 - 第 6 章 騙し討ちでシナの骨肉を斬る冷酷無比な大英帝国
 - 第 7 章 1919 年のインド・アムリトサル虐殺
 - 第 8 章 イギリスのインド統治史は約束破棄と不信の歴史
 - 第 9 章 支配者イギリス人の奸智・冷血・策謀・民心操縦
 - 第 10 章 インド人の描いた新鮮な日英関係史
 - 第 11 章 ポルトガルの「海の鎖」と大英帝国をつくった海賊の話
 - 第 12 章 シンガポールに着眼したイギリスの地政学的先見の明
 - 第 13 章 ビルマ独立戦争と日本軍の大義
- あとがき

著者が「GHQ^{ぶんしよ}焚書 図書開封」というシリーズ本にまとめて世に問うているのは、戦後のものの見方を正しいと思っているからでも、アメリカの正体を知りたいからでもない。ましてや、よく誤解されているように、戦前の日本に立ち還りたいからでもない。

敢えて言えば、明治以来の西洋文明に包み込まれ、手足を取られ、台詞を付けられてものを考えたり、書いたりしていることに貴方は疑問を持っていませんか、と歴史研究や人文・社会科学系の学問をしている人々に問い質したいと著者は言う。

とりわけ世界の学問とか歴史というテーマになると、なんとなく白人文明の視点から捉えられてきたといえる。すなわち、キリスト教的な価値観で捉えられているということである。「自由」の観念も、「進歩」の尺度も、古代・中世・近代という「時代区分」も、「近

代化」の基準も、法意識や経済制度などはとりわけそうである。白人文明の視線が大変大きく我が国を覆っている。はたしてこのままでいいのか？

我々は「外」から西洋を見ているだけでなく、我々の「内」にも西洋がある。「外なる西洋」と「内なる西洋」がある。

「内なる西洋」というのは、明治以来、我が国が近代化するために努力して学習し、そして身につけてきた西洋である。西洋は自分から切り離すことの出来ないものとして、我々の体の中にすでに入っている。肉体と化した西洋は簡単に振り捨てることはできない。

しかし、西洋はまた「外」にある。その「外なる西洋」は、過去の遠い時代には今とは違って見えていたはずである。ある種の禍^{まがまが}しい世界に見えていたはずである。われわれはそれをどういう風に認識していたか？時々そういうことを立ち止まって考える必要があるのではないか。著者は、明治維新から続いている日本人の歴史認識の問題、それを少し本質論的に考え直してみたいという。戦後の歴史認識がどうのという低レベルの話ではない。西洋とは我々にとって何であり、何であるべきかという明治以前の問いと同一の問題に立ち還りたいというのである。

さて、現在の日本人が持っているイギリス像は、イギリスは依然として貴族文化ないし王者の世界として関心を持たれているというものだ。

では、戦前には、どんな英国像が作られていたのだろうか？「アジア^{しんりやく} 侵略 秘史」(404p)を覗いてみよう。この中にはアジアを、また太平洋の島々を侵略した欧米の記録の一覧がある。

これを見てみよう。まず、ハワイ。最初はスペインが手に入れ、次いでアメリカの領土となった。次は、ワシントン島、ファニング島、ここはイギリスが進出している。トンガ島はオランダからイギリスの手に渡っている。クック島は勿論イギリス。中部太平洋にはマリアナ群島、マーシャル群島、パラオ群島、カロリン群島などがあって、これは日本の委任統治領となっている。もちろん現代は取り上げられている。そして、グアム島、これはスペインからアメリカの手に渡った。

さらに、ニューギニア、ここは複雑でオランダ→スペイン→イギリス・ドイツ・オランダ三国の共同統治→イギリス・オランダ・オーストラリア三国の委任統治と変遷。ナウル島とビスマルク群島はドイツが一度手にするが、第一次世界大戦で負けたため、ナウル島はイギリスの、ビスマルク群島はオーストラリアの委任統治になっている。

この記録を見ていくと、イギリスという文字が沢山出てきて、イギリスの太平洋進出がいかに盛んだったかが判る。

イギリスの進出は目立ったが、そのプロセスで起こったことは実は残酷物語だった。一つ一つの島に悲劇的な出来事があった。地球の裏側まで出っ張ってきた国々の攻略、侵略、略奪、殺害、虐殺・・・の歴史である。アジア或いは南の島々は間違いなく欧米諸国に侵略され続けたのであり、侵略のトップバッター、主役はイギリスだったことは一目瞭然で

あった。

美しいものの背後に醜いもの、優しいものの背後に恐ろしいものがある。世界の学問と歴史が白人優位の視点で展開され、そしてそれを日本人は自明のごとく受け入れている。

今日の学問・歴史観も欧米の打ち立てた理念と論理に沿って展開されている。

こうした禍^{まがまが}しい世界のトップランナーはイギリスだった。16世紀の覇者スペイン、17世紀の王者オランダを倒し、18世紀にはフランスの勢力拡大を阻止して、最後に勝利者となったのがイギリスだった。

イギリスが最終的に勝利を得た理由は、島国だったからである。海軍が強い。海の方からヨーロッパ全体を包み込み、抑え込んでしまった。これがイギリスのやり方だった。

日本人の多くの知識人は「近代世界システムと植民都市」（布野修司著）の著者と同じように、西洋の論理に縛られている。それが公論となり、そしてそれが教科書に記され、マスメディアの言論の土台になっているわけである。でも、それとは異なるものの見方が、一方でしっかりと自覚されていたら、「日本は戦争犯罪を行った」とか、「侵略国家だった」とか、「あの戦争はただの愚行だった」とか、そんな愚かなことは決して口にしないはずだ。

評者は歴史をあまり知らないので、不思議に思っていたことがあった。インドネシアを支配した白人、すなわちオランダ人だが、彼らが日本人に対してどういうことで怒っているかという、「黄色人種が白人と対等に渡り合うこと自体、許されないことだと、彼らは考えていた」という。「蘭領東印度」（インドネシア）といわれたあの地域の白人は、日本人に虐待されたという認識を持っているという。では、どういう原因で？日本人が鞭で打ったとか、日本人が彼らに恥辱を与えたとか、日本人が経済的な差別を強いたとか、そんな話ではない。日本人が白人を雇用したことが許せないというのである。

日本がインドネシアを統治した時代、オランダ語を禁止してインドネシア語を普及させた。これは日本政府が常にやったことであって、韓国でもハングルは日本の総督府が普及させた。それと同じように、日本政府は民族意識の涵養が大切だと考えて、インドネシアでは原地のインドネシア人にオランダ語を禁止して、インドネシア語の普及に努めた。すると、オランダ人たちは自分たちが虐待されたという認識を持ったという。インドネシアを統治した時代、日本人はインドネシア人とオランダ人を同等に扱った。オランダ人は「それが許せない」という。「俺たちを馬鹿にした」というわけである。

こういう連中とは価値観を異にしている、もうどうしようもないわけだが、この種の話は西洋人の書いた本には一切出てこないし、教科書にも、公的議論にも、新聞にも出てこない。

これではあの時代を生きた日本人の本当の心は判らない。立つ瀬がないわけだ。そういうところに、我が国の置かれている問題点があると考えて頂きたいと著者は言う。



コラムニストの高山正之氏がこんなことを書いている。「戦場にかける橋」は、第二次大戦中に日本軍の捕虜になって、捕虜条約規定によって、兵卒だった英国人があの泰^{たい}麵^{めん}鉄道の建設使役に駆り出されます。彼はそこで生まれて初めて東洋人である日本人に命令され、チーク材を切り出し、日本人が引いた設計図に従って働かされます。彼はこれを「すさまじい屈辱」と感じ、戦争が終わると、早速「戦場にかける橋」というシナリオを書きます。ただ、作品の中では高度な頭脳の必要な設計図は英国人が引いたことにしています。何故なら、日本人が引いた設計図など考えられなかったし、日本人が引いた設計図で仕事をするなど彼には耐えられなかったからです。

その彼が、今度は「白人が日本人に使役された恨み」を込めて、「猿の惑星」のシナリオも書きます。これも、皆さんは映画の中の主人公に同化して、面白おかしく見られたことと思いますが、彼が言いたかったのは、「猿は日本人」で、「ゴリラは黒人」だということです。

もし、あの戦争で負けていれば、映画の中で起きたような、つまり映画を見ている私たちも感じた異様な世界になっていただろうと彼は主張するのです。

評者も含めた日本人は、これら二本の映画に、そういう人種差別意識があるということも知らずに、また理解できずに彼の作品を絶賛しました。

マイケル・クライトンといえば、あの「ジュラシック・パーク」で有名ですが、彼の作品に「スフィア（球体）」というのがあります。この「スフィア」にも、次のような一節があります。

主人公たちが海底深く潜水し、得体の知れない物体に遭遇します。未知の世界から運ばれてきた薄気味悪い化け物と言う設定です。主人公はこの化け物を前にして、次のように言います。

「人間だって二つの目と一つの鼻を持っているからと言って理解し合えとは限らないだろう。中にはひと（人）族と呼べないほど面倒くさい人間もいる。その典型が日本人だ。アメリカ人と日本人はとても同じ世界の人間とは思えない」。すると、仲間が「その通りだ。日本人が同じでないことはアメリカ人なら誰でも知っているよ。この種の生き物も同じで、まったく理解できない。価値観も倫理もまるっきり違うんだ」と。

つまり、対応能力を欠いた日本人は、彼らにとっては宇宙人か、新種の化け物と同列であるとクライトンは小説の中で日本人批判を展開します。クライトンもよほど日本人からひどい目にあったことがあるのでしょう。日本人に対してどんな暴言を吐いても、どこからも反論されず、許されることをいいことに、彼らはいいたい放題です。

白人種が持つそうした意識が実は今の中東紛争やイラク戦争などの国際社会の動きを決める大きな原動力になっているのではないかと思わずにいられません。

ビルマという国は、今「ミャンマー」と呼ばれている。かつてのラングーンは「ヤンゴン」という名に変わっている。この旧ビルマは1886年にイギリスに降伏して、植民地にされた。イギリスとビルマの間では戦争が3回あった。最初が第一次英^{えい}麵^{めん}戦争（1822年）、第二次英麵戦争が1852年、第三次戦争が1885年からその翌年にかけて起こっている。

第三次戦争でビルマ王朝が降伏すると、イギリスは王と王妃を牛車に押し込めて屈辱を与え、城から追っ払い、玉座など、王家の財産を没収した。さらに驚くべきことに、国王

と王妃、それに 4 人の王女をインドに追いやる。王族を外国に流すのは、イギリスのお家芸である。同じようなことをインドでもやっている。インドのムガル帝国の最後の国王はビルマに流されている。ムガル国王は 5 年後に亡くなるが、遺体はインドに埋葬することを許されなかったという。

それから 30 年後、今度はビルマの国王がインドのボンベイに流され、そこで亡くなった。王位継承の第一位にあった第一王女は身分の低いインドの軍人と結婚させられている。しかも、この軍人には妻がいたという。他の王女たちは最貧層の社会に落とされて不運の中で亡くなっている。この話もコラムニストの高山正之氏の話です。・・・。

本書ではこういう話が満載で、とくに、中国に関しては、第 3 章、第 4 章、第 5 章、第 6 章に、インドに関しては、第 2 章、第 7 章、第 8 章、第 9 章、第 10 章に目を覆うような惨状がそれぞれまとめられている。

ここを読むと、大英帝国の繁栄は、インドへの暴虐とシナへの阿片禍で築き上げられたことが良く判る。

白人は「文明」と「野蛮」とを区別して、「文明」を讃える。自分達白人が「文明」で、その他の人種と地域は「野蛮」である。したがって、彼ら野蛮人に「文明」を教えるのだという傲りがあった。

すなわち、「太平洋の歴史は白人悪行の歴史であったというのが、現在では動かない歴史上の真実として認識されている」。しかし、「何故白人たちは悪行を働いたか。その真理と行動は」と続いていく。・・・。

植民地にしたところの民族を、さらに異民族に支配させるという、こういう汚いやり方を続けてきたのがイギリス人である。そういう歴史が、イギリスの歴史なのだ。

欧米は、欧米だけが「正義」で、アジア人には序列をつける。日本は近代化したせいで、「経済的にはまあまあ良いが、戦争は駄目だ」と言ってみたり、安倍首相が何か言うと「右翼だ」と決めつける。



ナチスの罪は、欧米諸国は胸を張って開示するが、日本の罪をアメリカが開示すれば、アメリカ、イギリスの太平洋戦争での問題点が明らかになるのを恐れてなかなか開示しないようだ。

つい最近も、従軍慰安婦問題で朝日新聞と仲良しのニューヨークタイムズまでもが朝鮮半島での強制連行の証拠は殆どなかったと報じた。

この調査にあたったのは、クリントン政権時の国防総省、CIA、FBI、国家安全保障局、米軍当局など戦争に関った全ての主要組織の未公開の公文書を点検し、ドイツと日本の戦争犯罪を 30 億円もかけ 7 年間にわたって調査したものである。

最終報告書は 2007 年米国議会に提出された。慰安婦問題の結論は、発表された一切の強制連行、性奴隷の証拠は発見できなかったという。

眠っていたアメリカの公文書 IWC 報告を発掘し、これを広めたのは、ジャーナリストのマイケル・ヨン氏である。日本にとっては、貴重な調査結果であるが、アメリカにとってはさしあたって利用価値がない調査結果だったのか、あるいはまた、よくあるように日本で騒がれている慰安婦問題の調査を未公開にして、後日これを上手く利用する積りだったのかも知れない。

親日家として知られるジョセフ・ナイでさえ、「日本を今後も自主防衛能力を持たない状態に留めておくために、アメリカは日米同盟を維持する必要がある。日本がアメリカに依存し続ける仕組みを作れば、我々はそのことを利用して、日本を脅しつけてアメリカにとって有利な軍事的。経済的要求を呑ませることができる」という対日政策を唱えているくらいだから。

本書を読むと、GHQ が占領政策の一環として、日本精神を絶滅させるために施した措置が約 7100 冊もの「健全図書」の強制的摘発と発禁処分にあったという。というのも、戦前には、国際情勢をきちんと把握し、分析した世界的レベルの図書が多くあったのである。これらは、正確に世界情勢や軍事・歴史に精通し、的確に解説していた。

焚書図書にある様な戦前の良書を通じて、我々は少しでも真実に迫り、欧米人の意識の仕方を学んで、そこから抜け出せない日本人が知識人の中にも、また政治家の中にも圧倒的に多いことに気付かされた。さらに、第二次世界大戦の正面の敵は実はイギリスだったということも教えてくれた。

本シリーズは、10 巻から読み始めたが、今後も続くことを考えれば、それぞれの巻が一つの大きな結論を目指しているのではないかと期待が膨らんでくる。

2015. 1. 19